

魯迅作品集 1

竹内 好訳



筑摩叢書 64

筑摩叢書 64

魯迅作品集

1

竹内 好 訳



竹内 好 (たけうち よしみ)

1910年 長野県に生まれる

1934年 東京帝国大学支那文学科を卒業

1977年 死去

著訳書 『竹内好全集』全17巻

『魯迅文集』全6巻 他

魯迅作品集 1

筑摩叢書 64

1966年8月30日 初版第1刷発行

1985年5月30日 改訳新版第1刷発行

訳 者 竹 内 好

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

発 行 所 株 式 筑 摩 書 房
会 社

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京 (291) 7651 (営業)
(294) 6711 (編集)

振 替 東 京 6-4123

郵 便 番 号 101-91

© 1985 Printed in Japan

1097-01064-4604

多田印刷・永興舎

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

魯迅作品集

1

呐喊

自序

狂人日記

孔乙己

藥

明日

小なさ出来事

髪の話

から騒ぎ

故郷

阿Q正伝

端午の節季

白光

166 155 98 83 71 64 60 50 36 29 11 3

兎と猫

あひるの喜劇

村芝居

彷徨

祝福

酒樓にて

幸福な家庭

石 鹼

常夜灯

さらし刑

高先生

孤独者

305 292 284 269 253 243 228 203

186 181 174

解	説	離	兄	傷
婚	弟	逝		

竹
内
好

439	395	379	363	336
-----	-----	-----	-----	-----

呐
喊

自序

私も若いころは、たくさん夢を見たものである。あとではあらかた忘れてしまったが、自分でも惜しいとは思わない。思いつくというものは、人を楽しませるものではあるが、時には人を寂しがらせないでもない。精神の糸に、過ぎ去った寂寞の時をつないでおいとて、何になろう。私としてはむしろ、それが完全に忘れられないのが苦しいのである。その忘れられない一部分が、いまとなって『呐喊』⁽¹⁾となった、というわけである。

私は、かつて四年あまりの間、しょっちゅう——ほとんど毎日、質屋と藥屋にかよいつめた。年齢は忘れてしまったが、ともかく藥屋のカウンターが私の背丈ほどあり、質屋のそれは背丈の倍ほどあった。私は、背丈の倍ほどあるカウンターの外から、着物や髪かざりなどをさし出し、さげすまれながら金を受取り、それから背丈ほどのカウンターへ行って、長わずらいの父のために薬を買った。家に帰れば帰るで、また仕事山ほどあった。かかりつけの医者が名医の評判高い人なので、その処方では添加物も奇妙なものばかり——冬に取れた蘆の根、三年霜にあたった

砂糖きび、つがいの कोरोギ、実のついた平地木……容易なことでは手に入らぬ品物ばかりである。それほどにしても父は、病が日ましに重くなり、とうとう死んでしまった。

ある程度楽な暮らしをしていた人が、急にどん底生活におちたとすれば、きっとその間に世のいつわらぬ姿が見えるだろうと私は思う。私がNへ行ってK学堂⁽²⁾にはいるつもりになったのも、たぶん人とちがった道をえらび、ちがった場所がちがった人と交りたかったせいであろう。母は、しょうことなしに八円の旅費を工面してくれて、すきなようにせよと言った。しかし母は泣いた。これは無理なかった。なぜなら、そのころは古典の勉強をして国家試験を受けるのが、正当なコースであり、洋学などやるのは、世間の眼からすると、行き場所のなくなった人間がついに魂を毛唐に売り渡したものと見られて、それだけよいにはずかしめられ、いやしめられるからであり、そればかりでなく母は、自分の息子に会えなくなるからであった。だが私は、そんなことに構っていられずに、とうとうNへ行ってK学堂に入学した。この学校で私ははじめて、世に物理や、数学や、地理や、歴史や、図画や、体操などの学問があることを知った。生理学は習わなかったが、私たちは木版本の『全体新論』や『化学衛生論』⁽³⁾などを手にすることができた。そしてその知識でこれまでの医者と言ったことや処方^{かた}のやり方を考えてみて、私は、漢方医というものは意識するといけないとかかわらず一種の騙りに過ぎない、と次第にさとするようになった。そして騙られた病人と、その家族に深く同情した。また翻訳された歴史書によって、日本の維新がかなりの部分、西洋医学に端を発している事実をも知ったのである。

これらの幼稚な知識のお蔭で、のちに私の学籍は、日本の地方の医学専門学校に置かれることになった。私は甘い夢をみていた。卒業して国に帰ったら、父と同様のあしらいを受けて苦しんでいる病人を救い、戦争のときは軍医になり、かたわら、国民の維新への信念を高めようと考えた。いま微生物学を教える方法がどんな進歩をとげたか、私はまったく知らないが、そのころはスライドを使って、微生物の形態を映してみせた。そこで、講義が一段落してまだ時間があると、教師は風景やニュースを映して学生に見せて、時間の穴をうめたものだ。ちょうど日露戦争の最中として、当然のことながら、戦争関係のスライドがわりに多かった。その度に私は、この教室で、同級生たちの拍手と喝采とに自分も調子を合わせるほかなかった。あるとき私は、思いがけずスライドでたくさんの中国人と絶えて久しい面会をした。まん中に手をしばられた男、それを取り囲んでおおぜいの男、どれも体格はいいが、無表情である。解説では、しばられているのはロシア軍のスバイを働き、見せしめに日本軍の手で首を斬られるところ、とり囲んでいるのは、その見せしめの祭典を見に來た連中であつた。

その学年がおわる前に、私は東京にもどつていた。あのことがあつて以来、私は、医学などは肝要でない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとい体格がよく、どんなに頑強であつても、せいぜいくだらぬ見せしめの材料と、その見物人になるだけだ。病氣したり死んだりする人間がたとい多かろうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。むしろわれわれの最初に果すべき任務は、かれらの精神を改造することだ。そして、精神の改造に役立つものといえば、当時の

私の考えでは、むしろ文芸が第一だった。そこで文芸運動をおこす気になった。東京にいる留学生仲間、法律政治、物理化学、さては警察や工学をやる連中ばかりで、文学や美術をやるものはいなかった。それでもどうやら、冷淡な空気のなかで、数人の同志を見つけることはできた。ほかに数人、必要なメンバーをかき集めて、相談の結果、まず第一歩として雑誌を出すことになった。誌名は「新しい生命」という意味を取ることにし、そのころ私たちに復古気分があったところから、簡単に「新生」とした。

『新生』の出版期日がせまったが、まず原稿を引き受けていた数人が姿をくらました。ついで資本も逃げてしまった。あとには文なしの三人だけが残された。はじめから時勢にそぐわぬ計画、失敗したとて人に文句をつける筋ではない。しかもその後は、この三人もそれぞれに運命が分かれて、共に未来のよき夢を語りあうこともできなくなった。これがわれわれの『新生』流産の顛末である。

私が、これまで経験したことのない味気なさを感じるようになったのは、それから後のことである。はじめは、なぜそうなのかわからなかった。後になって考えたことは、すべて提唱というもの、賛成されれば前進をうながすし、反対されれば奮闘をうながすのである。ところが、見知らぬ人々の間で叫んでみても、相手に反応がない場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかも涯しれぬ荒野にたったひとり立っているようなもので、身のおきどころがない。これは何と悲しいことであろう。そこで私は、自分の感じたものを寂寞と名づけた。

この寂寞は、さらに一日一日成長して、巨大な毒蛇のように、私の魂にまつわって離れなかった。

しかし私は、自分でもわけのわからぬ悲しみを抱いていたとはいえ、憤る心はさらになかった。なぜなら、この経験が私を反省させ、自分を見つめさせたからである。つまり私は、臂を振って叫べば呼応するもの雲の如しといった英雄ではないのだ。

ただ自分の寂寞だけは、除かないわけにかなかった。それはあまりにも苦痛だったから。そこで、いろいろの方法を用いて、自分の魂を麻醉させにかかった——自分を国民の中に埋めたり、自分を古代に返らせたり。その後も、もっと大きな寂寞、もっと大きな悲しみを、いくつも自分で体験したり、外から眺めたりした。すべて私にとって、思い出すに堪えない、それらを私の脳といっしょに泥の中に沈めてしまいたいものばかりである。とはいえ、私の麻醉法はききめがあったらしく、青年時代の慷慨悲憤はもうおこらなくなった。

S 会館⁽⁴⁾には広さ三間の小さな棟があった。むかし、庭の槐^{えんじゅ}の木で女が首を吊ったと言い伝えられていた。いまでは槐の木は、もう登れぬくらい高くなっているが、その棟にはまだ住み手はなかった。何年も私は、そこを寝ぐらにして、古い碑文を写していた。仮のすみ家に訪れる客はなし、古碑の中では問題にも主義にもぶつからずにすんだ。⁽⁵⁾ しかも私の生命は、このまま消えてゆくのである。これぞ私の唯一の願いでもあった。夏の夜は、蚊が多い。棕櫚^{しゅう}のうちわを使いなが

ら、槐の木の下に坐って、生い茂った葉越しにちらちら見える青空を眺めていると、よく青虫が首筋に落ちてきて冷やりとすることがあった。

そのころ、時たま話しにやってくるのは、古い友人の金心異^{オウシンイ}であった。手にさげている大型の鞆をばるテーブルの上にはうり出し、うわ着を脱いで、向かいあって坐る。犬ぎらいだから、まだ心臓がどきどきするらしい。

《きみは、こんなものを写して、何の役に立つのかね?》ある夜、私のやっている古碑の写本をめくりながら、かれはさも不審そうに訊ねた。

《何の役にも立たんさ》

《じゃ、何のつもりで写すんだ?》

《何のつもりもない》

《どうだい、文章でも書いて……》

かれの言う意味が私にはなかった。かれらは『新青年^{シンゼンネン}』という雑誌を出している。ところが、そのころは誰もまだ賛成してくれないし、といって反対するものもないようだった。かれらは寂寞におちいったのではないか、と私は思った。だが言っちゃった。

《かりにだね、鉄の部屋があるとするよ。窓はひとつもないし、こわすことも絶対にできんのだ。なかには熟睡している人間がおおぜいいる。まもなく窒息死してしまうだろう。だが昏睡状態で死へ移行するのだから、死の悲哀は感じないんだ。いま、大声を出して、まだ多少意識のある数

人を起こしたとすると、この不幸な少数のものに、どうせ助かりっこない臨終の苦しみを与えることになるが、それでも氣の毒と思わんかね》

《しかし、数人が起きたとすれば、その鉄の部屋をこわす希望が、絶対にないとは言えんじやないか》

そうだ。私には私なりの確信はあるが、しかし希望ということになれば、これは抹殺はできない。なぜなら、希望は将来にあるものゆえ、絶対にないという私の証拠で、ありうるというかれの説を論破することは不可能なのだ。そこで結局、私は文章を書くことを承諾した。これが最初の「狂人日記」という一篇である。その後は、踏み出した以上はもどるわけにいかず、友人たちに頼まれるたびに小説めいた文章を書いて、お茶をにごして来たのが、積み積って十数篇になった。

思うに私自身は、今ではもう、発言しないではいられぬから発言するタイプではなくなっている。だが、あのころの自分の寂寞の悲しみが忘れられないせいかな、時として思わず呐喊の音が口から出てしまう。せめてそれによって、寂寞のただ中を突進する勇者に、安んじて先頭をかけられるよう、慰めのひとつも献じたい。私の呐喊の音が、勇ましいか悲しいか、憎らしいかおかしいか、そんなことは顧みるいとまはない。ただ、呐喊であるからには、主将の命令はきかないわけにいかなかった。そのため私は、しばしば思いきって筆をまげた。「薬」では瑜児ユキの墓に忽然と花環を出現させたし、「明日」でも、単四シヤンイ娘子がついに息子に会う夢を見なかった、とは書か

なかった。当時の主將⁽⁷⁾が、消極性をきらったせいもあるが、自分でも、みずから苦しんだ寂寞を、私の若いころとおなじように甘い夢を見ている青年に伝染させたくなかったから。

こうしてみると、私の小説が芸術にはるかに遠いことは申すまでもない。ところが今でも小説という名でよばれるばかりでなく、一本にまとめる機会さえ与えられたのは、何はともあれ、まことに僥倖といわなくてはならない。僥倖の点は不安を感じるものの、この世にしばらく読者がつづくことを思うと、さすがに嬉しい。

そんなわけで自分の短篇小説集を出版する気になった。そしていま述べたような理由で書名を『呐喊』とした。

一九二二年十二月三日、北京において魯迅しるす。